

## 改訂第2版 序文

2017年に、本書「乳がん患者ケア パーフェクトブック」の初版が刊行された。それから、この第2版の刊行までに8年が経過した。この間、遺伝性乳がん卵巣がん症候群の診断に関わるBRCA遺伝子検査や、BRCA変異陽性の乳がん患者のリスク低減卵管卵巣切除術やリスク低減対側乳房切除術が保険適用となり、患者・家族はさまざまな選択に直面することとなった。薬物療法では、CDK4/6阻害薬や免疫チェックポイント阻害薬が多用されるようになり、従来とは異なる有害事象のモニタリングが行われるようになった。さらに、がんと生殖医療、アピアランスケア、乳房再建、リンパ浮腫、がんリハビリテーション等に関するさまざまなガイドライン・ガイドブックが刊行・改訂された。そして、日本乳癌学会編の「乳癌診療ガイドライン」が2022年に、「患者さんのための乳がん診療ガイドライン」は2023年に改訂版が刊行され、早期乳がんの定義が変更になった。また、「臨床・病理 乳癌取り扱い規約 第19版」では、乳がんの分類の変更があった。このように、さまざまな改訂が生じており、乳がん患者・家族のケアに関わる看護師には、高度な知識やスキルが求められている。

一方、日本看護協会の認定看護師に関する資格認定制度では、2019年に制度が改定となり、特定行為研修を含むB課程の教育がスタートした。腋窩ドレーン抜去を行うB課程修了の乳がん看護認定看護師も増えつつある。

さらに、日本乳癌学会は、2024年に乳がんチーム医療看護師制度を発足し、2025年7月からスタンダードレベル研修を開始した。このように、乳がん看護に携わる看護師の知識や技術を習得する場も拡大しており、今後の活躍が望まれている。

本書が、新人ナースから、認定看護師、専門看護師、特定看護師、診療看護師等のエキスパート・スペシャリストの臨床実践の向上に寄与するのはもちろんのこと、乳がんチーム医療のさらなる推進によって、乳がん患者・家族のQOLの向上につながることを期待する。

最後に、執筆にあたり多忙ななかご執筆いただいた先生方に心から感謝を申し上げるとともに、株式会社Gakkenコンテンツ開発本部メディカル事業部の皆様にこの場を借りてお礼申し上げる。そして、乳がんの予防・診断・治療・看護の発展に力を尽くしてくださった故矢形寛先生に敬意を表し本書を捧げる。

2025年11月

阿部恭子

## 改訂第2版 序文

2006 年の「Nursing Mook 乳がん患者ケアガイド」、2013 年の「がん看護セクション 乳がん患者ケア」に次ぐ第 3 弾として、2017 年に本書「乳がん患者ケアパーフェクトブック」が刊行された。いずれも阿部恭子先生と矢形寛先生による編集で発行され、乳がん看護に携わる医療者のバイブル的な存在として位置づけられている。

乳がん治療は年々刷新されており、2022 年には日本乳癌学会編の「乳癌診療ガイドライン」が改訂されている。本書もそれに合わせて改訂が必要であったが、編集者の矢形寛先生が 2019 年に予期せぬ病により早逝されたことと、その後に世界を震撼させた COVID-19 によるさまざまな事柄の遅延もあり、改訂版の編纂が遅れた。

今回改訂版を作成するにあたり、阿部先生から編集の依頼をいただいた。矢形先生は私の医局（旧千葉大学第一外科）の同門であり、私が千葉大学第一外科の乳腺研究室の責任者になった平成 6 年にその研究室の仲間になってくれた大切な後輩で、彼の早逝は私にとって大きな喪失感と悲しみである。その彼の思いの詰まった本書の改訂の編集という重責のため、お引き受けすべきか悩んだが、生前の矢形先生の顔が思い浮かび、彼の無念を想うと断るという選択肢はないという結論に達し、僥越ながらお引き受けすることにした次第である。

当初は 2024 年秋に上梓の予定だったが、薬物療法の変化や「臨床・病理 乳癌取り扱い規約」の改訂があり、編集中にさらに内容修正が必要となってしまったため、この時期の発刊になった。

矢形先生の思いを少しでも伝えられる内容になっていれば幸いである。

今回の改訂により、乳がん看護の実践能力の向上や看護の質的向上に資することを祈念している。

2025 年 11 月

鈴木正人